

奇跡の動き

それは、左手の人差し指から始まった。二〇〇〇年十一月の遅い午後、オフィスに座ってディナと話していたときのことだ。話題は忘れたが、おそらく私は何かについて断固として言い張っていたに違いない。話している最中、肘掛の上で私の指が動いていたのだ。ディナがそれに気づき、意識的にやったのかと訊いた。違う、と答えると彼女は「そう、じゃ、試してみて」と言った。

ケガを負ってほぼ五年、もし他の誰かに指を動かしてみなさいと言われてとしたら、私は断ただろう。失敗するのが嫌だから。指を動かすのに必要な運動信号は、損傷部よりもずっと下部に位置する脊髄（T-1）の、ある一部分から送られる。脳からの合図が脊髄を下って指を動かすのを期待できる根拠はひとつもない。ディナもそれを私に期待したわけではなかった。ただのゲームで、別に失敗したって構わないというわけだ。

左手の人差し指をかなり長い間見つめ、文字通り、それとの“関係”をつくらうとしばらく試みた。私は身体が完全になりたいと望んでいると信じていたし、数年前の足首の感染症が治癒した経緯も思い出した。ディナは辛抱強く待っていたが、すぐに何かが起こらなければきっと夕食の準備をしにキッチンへ行ってしまうと私は思った。さらに一心不乱に指を凝視し、私は突如声を上げた。

「動け！」

すると、動いたのだ。先端から第一関節までが上下に動き、リズムよく肘掛の表面を叩いている。動き続ける指を、ふたりは信じられない思いで見守った。しばらくしてから私は再度集中し、指令を出した。

「止まれ！」

指は止まった。

ディナは椅子から飛び出して、もっと近くで観察しようとして私の傍にやってきた。偶然ではないことを証明するためにもう一度、いやおそらく数回それを繰り返さなければならぬと、ふたりともわかっていた。二度目に同じ方法でやってみると、同じ結果が起こった。三度目、動かすときと止めるときの合図をディナが発した。四度目は、私が目を閉じた状態で、ディナが指示を出した。またもや成功した。

ひとしきり私を抱きしめた彼女が、私から身体を離れたときには目に涙を浮かべていた。

自分の脚で歩きたい

二〇〇一年七月八日、この日もまた文字通り重要な転機となった。さらなるテストを受けるために再度セントルイスを訪れていたときのことである。ジョンが、そろそろ私をプールに投げ込むときが来たかと判断したのだ。もちろん実際に“投げ入れる”わけではないが、それは私と彼のスタッフたちの双方にとって、かなりの“驚き”だった。

それまで、人工呼吸器に頼っていながらプールに入った患者はひとりもいなかった。リハビリセンターのほとんどは、人工呼吸器に頼っている四肢麻痺患者のためのアクアセラピーなど考えもしないだろう。もしチューブに水が入ったら？ 人工呼吸器がプールに落ちてしまったら？

ジョンの答えはこうだ。IQ 二桁以上の誰かが呼吸器を持ち、ほかの人たちは管が水中に入らないようにするさ、と。

それからすぐ、私は首まわりの浮き輪と腰の救命ベルトだけを着けて、六年ぶりに仰向けに浮かんでいた。すっかりリラックスし、身体を取り巻く暖かい水の感触を満喫した。理学療法士が私の肩を支えながら、私の身体を“へび”のように横から横へとやさしくくねらせた。やけに遠くみえる自分の両足が、ひゅっひゅっと前後に動いた。車椅子に座っている際に受けている圧縮から脊椎が解放され、身体が実際に伸びる感覚があった。

十分間の至福の時を味わった後、彼らは私に訓練を始めさせた。地上でできたすべての動き、そして他の動きもやることになった。

突然、理学療法士が「立ってみますか？」と言った。「もちろん」という答えしか浮かばなかった。次の瞬間、いくつもの手に支えられて私は直立していた。誰かが、私の足にゴムブーツを履かせ、足首に二、三キロほどの錘を固定した。膝を曲げて水面が気管のす

ぐ下にくるまで体を沈めるように言われた。次の動きは、脚で身体を押し上げて立つことである。四頭筋に集中し、今や私の人生に不可欠となった例のコネクションを再度築こうとした。

準備ができた時点で、無言の「ゴー」サインを自分自身に送った。

筋肉が緊張し、私は直立した。

突如、私は周りの皆の頭上に聳(そび)え立っていたのだ。ジョン、リンダ、ドリー、ドキュメンタリー映画のクルー、そしてさまざまな観衆が拍手喝采し、まるで月に向かうロケット発射を見ているかのように歓喜していた。

しかし、まだ続きがあった。立つことができた今、次にしなければいけないのはもちろん歩くことである。以前、ドクター・エジャートンのトレッドミルの上でステップを踏んだときは、身体は装具によって支えられており、足の動きはトレッドミルによってつくられていた。今回はまったく違う。初めて、事実上自力で歩くように言われているのだ。

補助の手はまだ、直立している私を支えていた。全体重を右足に移すと、理学療法士が、左足を見ながら前に蹴ってくださいと言った。これは、クリス・ファンティニーの肩を足で何百回と繰り返し押し返したときと、それほど違わなかった。

左の膝から強く蹴ってみると、突然、プールの底から数インチ上で左足が前に出るのが見えた。

もう一人の理学療法士が、右足を押し出して、体重を左に移してくださいと言った。うまくいった(男にしては、小さなステップだが……)。右足を前に蹴り、体重を移動させ、次の一步を踏み出す、というプロセスを繰り返した。この初めての試みで、私はチューブの長さ一杯まで八歩で進み、元の位置に身体を浮かして戻った。これを続けるうちに、何をすべきかを身体が覚えたようだった。脚が力強く押し出され、体重移動はより容易になり、動きはさらに正常に近くなった。セッションを終えるまでに、八回の水中歩行をした。

1995年5月27日、バージニア州シャーロットツヴィルでの乗馬競争で転落、脊髄損傷を起こし首から下が麻痺した。

2004年にはアテネオリンピックのコマーシャルに出演したが、10月9日に自宅で心不全を起こし昏睡状態となり、10日にニューヨーク州のノーザン・ウェストチェスター病院で死去した。52歳。